



葛根湯加川芎（せんきゅう）辛夷（しんい）

この処方、古典には見当たりません。江戸時代、明治時代にも見当たらず、どうも大正時代に創方されたものと考えられます。

この方剤は非常に興味があります。川芎は、古典的には頭痛に良いとされています。薬理作用は、平滑筋に対する鎮痙作用、中枢に対しては大脳皮質の鎮静作用があり、カフェインとは拮抗します。また、冠動脈の血管拡張作用もいわれています。また、辛夷は局所の収斂作用が強く、鼻汁（鼻粘膜の分泌物）を減少させます。動物実験では、降圧作用も認められています。ふらつきにも良いわけですね。

この二味が葛根湯に加えられていますので、鼻づまり、蓄膿症、慢性鼻炎、慢性副鼻腔炎、アレルギー性鼻炎などが適応になります。さらに、片頭痛や高血圧にも効果があると考えています。ただし、二味ですが、薬味が増えていますので、どちらかといえば慢性的に経過している場合に使うことが多いかと思えます。急性期であれば、やはり葛根湯の方が効果があるかと思えます。また、患者さんの治癒反応に乏しい、炎症反応が弱い場合には、川芎・辛夷に加え、伯州散（ハクシュウサン・・・健康保険には通っていませんが、まむし・鹿の角・モクズガニの黒焼き）を兼用するのが良いと思います。

アレルギー性鼻炎でサラサラの鼻汁であれば、小青竜湯、あるいは小青竜湯・小柴胡湯の合方がいいですし、膿性であれば葛根湯加桔梗石膏、あるいは荊芥連翹湯（けいがいれんぎょうとう）になります。